

特許技法！石目焼の世界

～ 時を超えた価値ある美しい陶磁器 ～

名古屋の七宝会社や開洋社で銅七宝・磁胎七宝といった名品を世に送り出した工人、竹内忠兵衛が1889年に「陶磁器ニ石目ヲ顯ハス法」で特許を取得した技法です。

磁器の素地に上絵を施した後、低火度で溶ける透明釉の粉末を振り掛けて焼成することによって、器面を石目調に仕上げます。この石目の風合いにより光の反射が抑えられることで、素地の水色や淡紅色と相まって、淡くやわらかな雰囲気を持つ独特の美しさを持った作品が出来上がります。その気品に満ち、ほのかな色気さえ漂うやきものは、まさに「美麗」と言えるでしょう。

竹内忠兵衛 [1852-1922年]

1871年、従来の家内工業から近代的な産業とすべく、名古屋に七宝会社が設立されました。竹内忠兵衛は、鈴木清一郎、塚本甚右衛門とともに、その中心工人として活躍しました。第1・2回内国勸業博覧会（1877年、1881年）では、陶磁胎七宝を出品して、2回とも嘉賞を受賞しました。1889年には石目焼の特許を取得しています。

< 裏印「五一五二五二二」の解説 >

特許取得日の明治22年5月25日を表していて、末尾の「五一」は、特許年限の15年を表しています。

特許第六七七號

第五十七類

出願 明治二十一年五月二十二日
特許 明治二十二年五月二十五日
特許年限 十五年

(明治三十七年五月二十四日
年限滿了ニ依リ特許權消滅)

愛知縣名古屋區新道町百五十一番戶

特許權者 竹 内 忠 兵 衛

明 細 書

陶磁器ニ石目ヲ顯ハス法

此發明ハ陶磁器ノ面ニ一種ノ釉藥ヲ施シ以テ石目ヲ顯ハス新規有益ナル方法ニ係ル

此方法ヲ施行スルニハ先ツ釉藥ニ用フル合成劑ヲ製スルモノトス而テ此合成劑ハ日岡石白玉唐土ヲ混和粉末ニスルモノニシテ其各成分ノ割合ハ大約左ノ如シ

日岡石 三匁五分

白玉

十三匁

唐土

八匁

斯ノ如クシテ合成劑ヲ製成スレハ通常法ニヨリ釉藥ヲ施シタル陶磁器ノ面ニ海羅ノ水溶液若クハコレト均シキ効力ヲ有スル粘液ヲ塗布シ其上ニ前陳ノ合成劑ヲ適宜ニ振り掛ケ而テ之ヲ竈ニ入レテ焼付ケルモノトス

此方法ニヨレハ一種雅致アル石目ヲ陶磁器ノ面ニ顯ハシ得ルノミナラス其面ニ水金ヲ以テ着色シタル字畫ノ如キハ此石目釉藥ノ爲メニ剝脫スルノ憂ナキヲ以テ有益ナリ

左ニ予カ本發明ノ特許ヲ請求スル區域ヲ掲ク

一 本書ニ記載セル如ク陶磁器ニ海羅ノ水溶液若クハコレト均シキ効力ヲ有スル粘液ヲ塗布シ其上ニ日岡石白玉唐土ヨリ成ル合成劑ヲ振り掛ケ而テ之ヲ焼付ケ以テ石目ヲ顯ス法

一 前項ノ方法ヲ以テ石目ヲ顯ハシタル陶磁器